



ヒツジの世界観

第5回(最終回) シリアのヒツジ

文：帯広畜産大学 平田 昌弘

イスラム社会においては
ヒツジを屠^{ほふ}り共に食するということは
神への従順と畏敬を意味する

ハッジとはメッカ巡礼のことである。ハッジは、イスラム教では義務と定め、イスラム歴(陰暦)の12月に行なわれる。このイスラム教で主要な宗教行事の中心にヒツジがいるのだ。

ハッジ月が終わると(1995年では5月9日が最終日)、翌日からアイード・アドハーと呼ばれる祝日となる。アイードとは祝日、アドハーとは「羊を屠^{ほふ}る」という意。このお祝いには、文字通りヒツジが犠牲として捧げられる(写真右下)。この祝日の日にヒツジを屠^{ほふ}るようになった由縁は、旧約聖書の歴史時代に遡る。それは、かつてアブラハムが神からの啓示により息子イサクを神に命を捧げようとした。まさにその瞬間、ヒツジが現れ、アブラハムは息子イサクの代わりにそのヒツジを屠^{ほふ}って神に捧げた。以後、この出来事に由来して、ヒツジを神に捧げる習慣が定着する。西アジアのイスラム教徒にとっては、「ヒツジを屠^{ほふ}る」という行為は、アブラハムが神の言葉に従い息子イサクをも神に

捧げようとした神への従順さ、そして、哀れみ深い神への畏敬の念を象徴しているのである。このヒツジを屠^{ほふ}る行為は、サウジアラビアのメッカで、西アジアの各家庭でそれぞれに行なわれる。この日、西アジアでは何万ものヒツジが屠^{ほふ}られることであろう。西アジアのイスラム教徒にとっては、ヒツジは従順さと神への畏敬の象徴として世界観を形成しているが、そんなにも毎年沢山ほふられるなんて西アジアのヒツジはなんとも可愛そうである。

アイード・アドハー初日。街中にヒツジの鮮血が流れる。





砂煙をあげるヒツジたち。シリアのヒツジたちは今日も厳しい環境の中を逞しく生きてゆく。

乾燥した極めて厳しい生態環境の中を生き抜く「シリアのヒツジ」を4回にわたって紹介してきた。牧畜民はヒツジの肉を食うよりもヒツジのミルクで命を繋いでいる事実をお伝えした。ヒツジの元本はそのままに、その利子で生き延びる戦略だ。しかし、イスラム教のお祭りや親しい友人と久しぶりに再会する際には、ヒツジを屠り、前回紹介したようなヒツジ肉をふんだんに使った料理がこの時とばかりに登場する。今回は、ヒツジをハレの日に用いるヒツジの世界観やご馳走のもて成しの意味合いについて紹介したい。

ハッジ巡礼の帰還者を迎える宴 人々はヒツジの肉で盛大にもて成す

ハッジは、イスラム教徒ならば誰しものがサウジアラビアの遠く離れたメッカへと一生に一回は巡礼したいと切望している。しかし、ハッジは誰もが行けるわけではなく、メッカまで巡礼できるだけの財力を持つ者だけが実際に実行できる宗教行事なのだ。

サウジアラビアから陸路でおよそ1,500km 離れるシリア北西部のアレッポ市では、4日間もかけてメッカ巡礼者が戻ってくる。1995年、ハッジからの帰還が5月13日から始まり、2週間後の5月27日頃まで続いた。迎える方は迎える方で胸膨らませてハッジ帰還者を待ち受ける。迎える家族達は、抑え切れずアレッポ市街に車で飛び出し、郊外は待ち受ける沢山のひとでござったがえす。家族親族そして友人等が待ち受ける。タイコを鳴らし、民族衣装をまとった男子の踊りで賑やかに間近に帰るハッジを待ち受ける。ハッジを迎えると、またタイコと踊りで帰還を賑やかに祝う。メッカ巡礼者は、白い帽子に白い服をまとして、車から颯爽

と降り立つ。道端にはジュースやポップコーンの出店も出ていたりする。こうなると一種のお祭り騒ぎである。喜びを音楽と踊りで親族友人と分かち合う。

だが、ハッジ巡礼者を迎えるお祭りの行事は、これからが本番なのである。ハッジ巡礼者を向かい入れた家族では、その夜、再び羊を屠り、メッカ巡礼を無事終え、道中も守られたことへの感謝を神に表現する。「spinnuts No.65」p24~27で紹介したヒツジ肉の料理・マンサフなどのヒツジの肉料理を用意し、親族友人と夜を徹して心ゆくまで堪能し、無事に帰還できた喜びを味わうのである。このメッカ巡礼というイスラム教における重要な宗教行事にも、そのもて成しの中心にヒツジがやはりいるのだ。

ハッジ巡礼者が帰ってきてから、親戚友人が毎日のように訪れてきて、祝いの言葉を述べる。このように、ハッジ巡礼者は、その喜びを親戚友人の笑顔とヒツジの肉塊と共に約1週間過ごすのである。ここでもヒツジはもて成しのために犠牲になり、シリアのヒツジはなんとも可愛そうなのだ。



左:マンサフを共に分かち合い、ハッジ巡礼者の帰還を皆で喜び合う。その宴を支えるのがヒツジの血肉なのである。上:ハッジ巡礼者の帰還。受け入れる側では、盛大に飾り付け、ハッジになったことを喜び祝う。

もて成されたら、もて成し返すのが礼儀 それは厳しい気候風土に住む遊牧民の 相互扶助の社会関係なのだ。

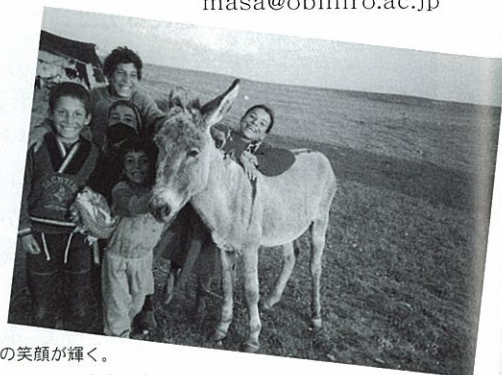
街でたまたま出会い、話している内に意気統合すると食事の招待にきまって誘われたりする。シリア人のもて成しは厚い。ましてや友人宅を訪ねた際には、決まって食事の振舞いを受ける。シリアでは、親しい友人同士が家庭へ食事に招き合っており、人間関係を深め合う。誘ったら誘い返すのが、暗黙の内の礼儀。もて成しが常に一方的であるならば、受けてばかりいる相手はいずれ仲間外れとなるから注意が必要だ。

ベドウィンの家庭を訪れると、まず甘い紅茶が出され、たいていはヒツジを屠ったご馳走が出される。それが最後のヒツジ、食糧、水であっても、もし人が尋ねて求めたならばもて成さなければならぬとはイスラム教の教えである。もて成しは確かに厚く、それを美德としている。人の器の大きさの尺度ともしている。もて成しという行為は、神様から与えられた恵であり、人に良くしたことにより死後の天国に一歩近づけたとシリア人は思い、もて成した方がかえって神様に感謝するのである。もて成された方も、もて成した人へは直接感謝せずに、神様に感謝する。宗教というフィル

ターを通して、人が人にもて成す行為が神との関係に置き換えられているのである。

しかし、相手をもて成すという行為は、将来に持て成されるという自分への投資でもある。つまり、集団間の関係性を強め、相互に扶助しておけば、食糧が不作となっても周囲からの援助が見込め、ある集団が食料をより安定して入手できることとなる。シリアのような厳しい生態環境においては、一見相手への一方方向的なもて成しと見受けられる努力は、集団としての食糧獲得上での安定性を促す方策とも考えられるのだ。シリアの自然環境は想像もできないくらい厳しい。そんな状況で、ヒツジは社会関係強化のために用いられているのだ。

いつか、みなさんと牧畜民の飼うヒツジについて語り合えることを楽しみにしています。 平田昌弘
masa@obihiro.ac.jp



シリアの牧童たちの笑顔が輝く。
この笑顔にシリアのヒツジの未来を感じる。